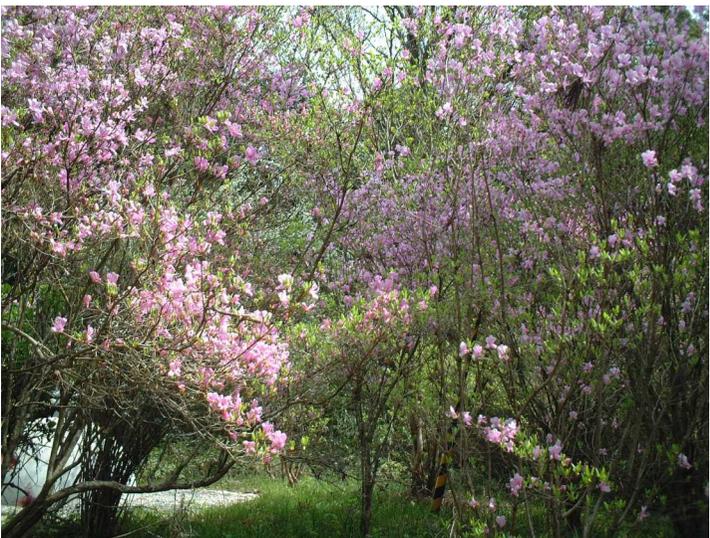


「貝の帆」抄

3月25日（金）。弟の自死。自死した人間は先祖の墓に入れない。漁師の子孫にわざわざ起こるからだ。弟の骨は、見せかけの葬儀の後、海に捨てられる。その時。

「見たこともない種類の、全体が青と白の筋に覆われ、角張った形状の大型の二枚貝がぼつかりと浮かび上がったと思うと、それは貝殻をまるで帆のように立てたのだ。そして、一杯に潮風を受けるやいなや波のまにまに滑走し、瞬く間に、みなぎる生々流転の気の方へ消えた」



奈良県 大宇陀 大蔵寺 山つつじ

読みながらふと、年の離れた従兄弟のことを思い出した。幼い私が見えているのはたった一つの光景である。

生家は菓子問屋を営んでいた。春になると従業員と製造業者が日帰りのバス旅行に行った。よく雨が降るので「春雨会」と名づけていた。満員のバスの中、一升瓶を片手に従兄弟は前から奥へと渡ってきた。ずいぶん酔っていた。その光景が不意に頭に浮かんだ。笑っていた。何か叫んでいた。

従兄弟は心中をした。それもまた春だった。何処までも続く花の中を二人は手を取り合って歩いたのだろう。

私の兄が従兄弟の話が出る度に一つ話のように言う。「Tちゃんは、キャッチボールを止めないんだ。暗くてボールが見えなくなっているのに。もう一球、もう一球ってね。その後、本当に直ぐだった」

今日、父の墓参りに行った。従兄弟の墓は本家の墓から離れたところにある。小さい墓だと記憶している。探せば良かったのに。

